

## 第5章 旭川市におけるアイヌ文化の動態 —手工芸に注目して—

上山浩次郎

北海道大学大学院教育学研究院助教

### はじめに

アイヌ文化に限らず、文化は一般に地域的な共通点と多様性をもちつつ、時間的に変容してきた。この点をふまえて、上山（2018a）では、とくに1945年以降に注目し、アイヌ文化の歴史的な変遷を、失われつつある文化を保存する段階から、アイヌ文化振興法（「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」）に象徴的に示される積極的に振興する段階へと変化しているという記述を試みた。しかし、そこでは、地域的な相違やアイヌ文化の多様性には十分な検討が加えられなかつた。

その点、西谷内（2018）では、白老町を対象に、イオマンテ（飼い熊送り）が持つ機能には「外交のツール」「ビジネス戦略」「蔑視と憧憬（のジレンマ）」「名誉の回復」という歴史的な変遷がみられるとしている。この点を受けて、上山（2018b）では、帯広市の「カムイトウウポポ保存会」の歴史的な展開をふまえた後、その組織がもつ個人にとっての機能や意味を検討した。

以上をふまえて、本章では、旭川市を対象に、とくにアイヌの人々が制作してきた手工芸というアイヌ文化の歴史的な動態を明らかにしてみたい。ここで、手工芸とは、時代によってはアイヌ細工、アイヌの木彫り、アイヌ民芸品等と呼称されてきたもので、木彫り・刺繡・編物・織物などをおおよそ指すとする。旭川市はこうした手工芸制作で有名な地域の1つであり、後述の木彫り熊の松井梅太郎や、編み物（やユーカラ）の杉村キナラブックや杉村京子など著名な職人や文化伝承者を輩出してきた。そこで、アイヌ文化の歴史的な変遷を描く一環として、旭川市においてアイヌの人々が作成してきた手工芸の歴史的な動態を記述してみたい。そして、その上で、こうした手工芸が、アイヌの人々や地域社会にとって、どのような機能や意味をもったのか考察を加えてみる。

アイヌ文化の歴史的な変容を捉える際、観光などの産業的な視点の重要性はつとに指摘されてきた（斎藤 1994; 大塚 1996）。また、上山（2018a）で触れたように、政策的な動向もアイヌ文化の変容に影響を及ぼす。とはいえ、こうした取り組みは、特定地域の特定のアイヌ文化の歴史的な変遷を具体的に描く、という点ではさらに検討する余地があろう。そこで、本章では、アイヌ文化の変遷を、旭川市の手工芸に焦点を絞り、その歴史的な動態を記述することを目的とする。

### 第1節 戦前におけるアイヌの人々による手工芸の動態

近世前期において、アイヌの人々は、基本的には生活用具を自らの手で制作しつつ、和人との交易、具体的には海産物・毛皮・鶯羽等と米・酒・木綿との交易を行っていたと考えられる。ただ、時代を経るごとに、その具体的な交易品として手工芸品の比重が高まってきた。こうした手工芸品は「蝦夷地みやげ」と呼ばれ、当時の知識人には「蝦夷趣味」ともいえる流行もあった。このように近代以前において、アイヌの手工芸品は、和人を想定した形で贈与・交換・商品に資するものと

しても制作されていた（海保 1985; 大塚 1982, 2003; 斎藤 1994, 2007ab, 2012, 2018）。

しかし、上川においては、近世はもちろん、明治に入ってからもそうした手工芸品が交易等において大きな地位を占めていたとは言い難い。それは、和人からみて「深山幽谷、人跡隔絶の地」（原田 1994: 762）であったことが関係しているかもしれない。原田（1994）は、1872（明治5）年の高畠利宣の上川調査「復命書」にもとづいて、上川アイヌの生産活動として、漁労・狩猟・採集が主であること、鮭の生産量が多大でその多くは干鮭として保存食・交易品として利用されていること、熊だけでなくキツネなどの獵も少なくなくそこで得られた獸皮等も交易品に充てられたこと等を指摘している。ただし、高畠利宣が1873（明治6）年に建白書に添えて提出した「上川中川物産取調書」のアイヌの生産に関わる品目には、熊皮・熊胆・鷲・鱒・鮭等に加えて、アットウシ織・キナ筵・樺皮・シナ皮、丸木船などがみられることも指摘している。とはいっても、交易においてもっとも高価な種類に属するものは獸皮であったという。

こうした傾向は、1880年代においても同様であった可能性が高い。原田（1994）には、当時上川アイヌにとって唯一ともいってよい交易相手であった鈴木亀造（原田 2002）の1885（明治18）～1889（明治22）年における「石狩川上貸付為替帳」にもとづいてアイヌの人々からの買上品として熊皮などの獸皮やヤツメウナギが記載されているからである。

とはいっても、1890年代以降、こうした動向に変化の兆しがみられる。象徴的なものは1890（明治23）年に旭川・永山・神居の三屯田兵村が設置されたことである。こうした事実は、和人がほとんど定住していなかった上川に一定数の和人が定住し始めたこと、それを背景として一方でアイヌの人々にとって上川近辺の狩猟・採集活動の選択肢の幅が狭まること、他方でそうした和人向けの市場が形成されうる可能性が開かれたことを意味しよう。実際、鷹栖村役場（1914: 6-12）には、1894（明治27）年頃、アイヌの人々は、漁猟が主要な生産活動でありフキや蕨などの「副食品」を採取しているものの、樺皮をはぎ、時には彫刻手工芸を制作し、これらを市場で販売することがみられると記述されている。

こうした動向をさらに推し進めたのは、1899（明治32）年、旭川に第七師団を設置することが決定されたことだろう。このことは、軍事関係者・工事関係者等の和人のさらなる定住化を意味する。こうした点を背景に、木村（1999: 60）によれば、1900（明治33）年、旭川に土産品店「山田集珍堂」が開店し、アイヌの人々が使用した日用雑貨衣料品などを収集陳列し併せて簡単なアイヌ彫りを製造販売させており、1903（明治36）年には神崎四郎がアイヌ民芸品も扱う神崎商店を開店している。他方、相川（2003）によれば、1902（明治35）年頃に旭川駅にみやげ品店が開店した。その取扱い品には、アットウシ織などのアイヌの日用雑貨や衣料品があり、その店頭ではアイヌ夫婦によるアイヌ彫りやアイヌ刺繡などの実演販売も行われていた。このアイヌ民芸品は、アイヌの人々の副業で作らせていたという。このように詳細な時期には不明な点が残るもの、第七師団の設置をうけて和人向けの手工芸品の需要が高まりをみせていたと判断することができよう<sup>1)</sup>。

谷本（2006）では、1905（明治38）年における北海タイムス旭川支社の田中道孝によるルポルタージュをもとに当時の近文アイヌの生活が考察されている。それによれば、当時のアイヌの人々には、耕地によらずに伝統的な生業形態を維持しつつ、貨幣獲得手段を模索する姿がみられるという。その際、貨幣獲得手段として選ばれたのは、商品採集物と手工業品の生産であった。ここで商品採集とは、具体的には白樺の皮や山菜などの植物採集のことであり、主に女性によって担われ

た。他方、手工業品は、近世以来「蝦夷細工」として和人向けに生産されていた茶盆・手拭掛・糸巻であり、主に男性によって担われた。とくに手工芸のうち茶盆・手拭掛は和人社会での流通を強く意識したものといえよう。

また、木村（1999: 61）には、明治末期には、手工芸品制作が活発になり、ヤギイカシと親しまれた伊藤新太郎がアイヌ人形などの熊以外のものを全部手仕事で売っていたこと、佐々木長斎文（筆者注——後述の佐々木長左衛門か？）がアイヌ学校を経営（筆者注——に勤務か？）しながら木彫りを制作していたこと、1908（明治41）年には高橋浅吉が土産品店「梅鳳堂」を開店させたという記述がある。

ただし、多くのアイヌの人々にとって主な生業はこうした手工芸品制作ではなかったと考える方が妥当だろう。杉村・大塚（2012）には、杉村京子の母キナラブックの結婚当時（1907（明治40）年）の頃は、アイヌ細工はよく売れており衣紋掛やチタラベ（花ゴザ）を先に触れた神崎商店で買ってくれていたこと、雨で畠仕事ができない時や冬のよい稼ぎになることなどの記述もあるものの、女性は自分の所の畠仕事と近くの和人の農家への出仕事、男性は狩猟や冬山造材や測量人夫などの山仕事が多かったという記述がある。また、谷本（2006）では、近文で雜穀荒物商を営みアイヌの人々とも取引していた上田商店の貸付帳をもとに、1910（明治43）年3月から1912（明治45）年4月における間宮家との取引も考察されている。それによれば、この期間において取引項目が明記されている6件のうち5件が毛皮の出荷となっている。また、他の家との取引をみると、リス等の獣皮・ヤマベなどの狩猟・漁撈物が取引の対象となっている様子がうかがえることや、小豆などの農産物を出荷のメインとしている家もあることが指摘されている。

このように手工芸品は副業的に作られていた。ただ、それへの需要や可能性を見込んだ動きもさらにみられるようになる。たとえば、明治の第二次旧土人保護地事件（1903（明治36）年5月～1906（明治39）年6月）後には、川上コヌサアイヌ宅の参考館が設置されている（谷本2009）。旭川区も、区政の木工振興策の流れと、道庁が中心となって進められた「旧土人保護事業」の一環として、1916（大正5）年からアイヌの手工芸の生産奨励をすすめる（木村1999: 119）。続けて、1917（大正6）年から特別会計旧土人保護費を計上し、アイヌの人々が制作した製品を区がいったん購入し、統制をとって販売する方法をとった。この年の購入金額は443円であった。その後、1924（大正13）年には売り上げが1,000円に達したという（村上1959、相川1995a）。さらに、1926（大正15）年には佐々木長左衛門がアイヌ手工芸等を扱う佐々木豊栄堂を開店している（金倉2006: 384）。杉村京子は、父は馬車追いが生業であったが、その仕事がない時に制作していた衣紋掛・糸巻き・箸などを佐々木長左衛門の店に持つて行くことが多かったという（杉村・大塚2012）。

竹ヶ原（2010）では、佐々木長左衛門編『北海道旭川市近文アイヌ部落概況』所収の「主ナル収入」という1925（大正14）年度の近文アイヌの全収入額と内訳に関するデータをもとに当時の近文アイヌの生計手段が検討されている。それによれば、「農産収入」が15,200円、「狩猟収入」が12,690円、「山林収入」（薪・樹皮・野菜果実）が1,000円、「工業収入」（アイヌ細工）が1,200円、「労働収入」が4,000円となっている。また、松田（2013）に掲載されている、旭川市が1927（昭和2）年に発行した「旭川市アイヌ保護概況」によれば、「特殊ノ職業ニ從事スル者」の中に「アイヌ細工從事者 男16人 女20人 獣猟從事者51人」（1926（昭和元）年12月31日調

査) という記述がみられる。また、小坂 (1994: 26-7) では、1926 (大正15) 年頃においては、女性は農業、男性は出稼ぎや、リス・熊・キツネなどの狩猟が主な生活手段であり、明治末期から徐々に作り始めたクマの人形・衣紋掛・楊枝入れ・箸・はがき入れ・タバコ盆・菓子盆・ひしゃく・老人男女のアイヌ人形といったアイヌ細工も大きな収入源となっていたと整理されている。このようにみれば、この時期においては、アイヌの人々にとって手工芸制作は、明治前半と比べれば貨幣獲得の手段としての意味合いを強めてきたものの、農業や狩猟に対する副業的な位置づけであったと整理することができよう。

大正の末期頃、アイヌの人々による手工芸ではアイヌ人形がもっとも人気があった (木村 1999: 162)。この間、近文では、熊の木彫りも制作されてもいた。だが、「わに熊」「ぶた熊」などと悪評を受けていたように市販にならないものが多数であった。しかし、1922~23 (大正11~12) 年に八雲で家庭副業として奨励された熊の彫刻は良品であり、その制作物が近文にも入ることで刺激をうけ、旭川市でも奨励し買上をすることになった。だが、基礎技法が不十分であることなどから市販に適さないものも納入された。そこで、大正末期に東京美術学校の羽賀修三を招き木の見方やノミの使い方などの指導を、1930~1931 (昭和5~6) 年には郷土出身の加藤顯清を招き講習を開くなどの技術の向上を図った (村上 1959)。そして、1931 (昭和6) 年頃から旭川で木彫り熊が店頭に出始める (相川 1995b)。

都会に近いという販売の地の利も活かし、熊だけでなくその他の民芸品のレベルもあがっていった。また、北海道庁や旭川市が主催する講習会等に参加してもいった。たとえば、1933 (昭和8) 年に札幌で行われた北海道庁主催、加藤顯清が講師の熊彫り講習会に旭川から松井梅太郎や川村カ子トが参加している。さらに、1936 (昭和11) 年には、旭川で市が独自に主催した第1回木彫講習会が開催されている。この講習会には、当時としては珍しい和人で熊彫り業をしていた平塚賢智が参加している (相川 1997, 1998ab, 1999)。石島 (1981) によれば、平塚賢智は、松井梅太郎が熊を彫る姿や木を彫るということに魅せられて彫刻の世界を目指すようになった。その際、お互いの信頼と理解が必要と考え、アイヌの人たちの生活に飛び込んで行く中で、アイヌの人々の生活習慣・宗教などを知り、後には熊送りなどで古老として祭典に参加したという。なお、相川 (1999) には、平塚賢智が木彫りを始めた1933 (昭和8) 年の頃には、すくなくとももう一人和人の熊彫りがいたことが記されている。

いずれにせよ、こうした地の利や講習などの取り組みを背景に、アイヌの工芸を副業として奨励し経済的生活の向上と郷土芸術を紹介するために1935 (昭和10) 年に北海道庁と北海道社会事業協会共催で開催された「アイヌ手工芸展覧会」において、松井梅太郎の木彫り熊が名誉賞を受賞することになる。また、その際には、1等賞のアットウシ織、2等賞のチタラベ (花ゴザ) と木彫り熊、3等賞の木彫り熊の作成者は旭川の者であり、旭川のアイヌの人々の手工芸の技術の高さが見て取れる。そして、1936 (昭和11) 年には、北海道府長官の献上品として、松井梅太郎の木彫り熊が天皇に奏上された (相川 1997, 1998ab, 1999)。

こうした動向は、近文アイヌの間に集荷と出荷の組織を立ち上げる動きももたらした。具体的には、1932 (昭和7) 年に、「荒井氏宅で川村兄弟外9名集合して」「近文協同経営組合」が設立された<sup>2)</sup>。さらに、保護地処分後の1935 (昭和10) 年には、「旭川市近文の旧土人53名」によって「旭川アイヌ手工芸品組合」が設立された。この組織は、旭川市社会課主導で立ちあげられた

もので、「道府保管の土人共有財産」から資金を年利1分の割で貸付を受け、冬の期間にその資金で手工芸品を買上げ、夏に「値段をよく」売却させる仕組みを構想したものだった。手工芸品は多岐にわたっており、たとえば、1936（昭和11）年では、熊・手拭掛・衣紋掛・洋服掛・箸・匙・糸巻・針入糸巻・パイプ・座布団・ホン袋・ホンチタラベ（敷物）・壁皿・ステッキ・盆である。出荷者は計42名、チタラベ（花ゴザ）の作成は女性に限定されるものの、熊や箸は男女問わず制作している。数量が多いのは熊で出荷数の過半数に及ぶ。また、松井梅太郎の支払い単価は他の制作者よりも高額であった。この組織は、少なくとも1938（昭和13）年4月までは機能した。その後、1938（昭和13）年5月には加藤顯清を名誉会長に、「梅鳳堂」主人高橋康夫を専務理事とした「アイヌ民芸協会」が設立されている（谷本 2009）。この「アイヌ民芸協会」には和人も参加するような盛況になっていた（木村 1999: 202）。

この時期の近文アイヌの生計状態を、河野（1981: 114-8）に所収されている「旭川市旧土人保護地処分法案資料」の「近文旧土人生計状態調」（1933（昭和8）年10月調）から確認してみよう。まず、記載されている氏名計66名のうち「主業」が「農」である者が50名、「日雇」が11名、「手工」が2名、「アイヌ細工品」「アイヌ細工品竹商（ママ）」「写真」がそれぞれ1名であった。「副業」をみると、「手工」が17名、「アイヌ参考館」が2名である。全体の収入内訳を計算すると、「狩猟額」が1,302円、「労働賃」が1,949円、「米麦額」が5,285円、「手工額」が2,687円、「商益」が446円、「参考館収入」が305円となっている。「手工額」は全体収入のうちおよそ22%を占めている。ただし、個人によっては「手工」がもっとも額が高い場合もみられる。具体的には、15名の者が収入内訳に占める割合において「手工額」がもっとも大きい。このデータを、先に触れた1925（大正14）年度の近文アイヌの全収入額と内訳に関するデータや1927（昭和2）年の「旭川市アイヌ保護概況」と単純に比較することには慎重になる必要があろう。ただ、仮に比較できるとすれば、生計やその手段において、狩猟等の重要性の低下と手工芸の重要性の増加が同時に進行していることが読みとれる。また、調査時点の1933（昭和8）年は、前述の1935（昭和10）年の「アイヌ手工芸展覧会」受賞等より以前であるから、1933（昭和8）年以降には、生計に占める手工芸の重要性がさらに増していくと推測することも可能だろう。

また、1935（昭和10）年前後には、全国的に観光ブームが起り、北海道にも多くの観光客が訪れていた。その際、木彫り熊は観光土産にふさわしいものであり、旭川の人々は道内の観光地に出向き売り出し始めた。たとえば、荒井源次郎・ミチは1935（昭和10）年8月に札幌の温泉地である定山渓に移り、アイヌ民芸品制作販売を行うようになった。転居後、民芸品制作のために旭川から彫刻師を数名呼び寄せてもらっている<sup>3)</sup>。また、同じく1935（昭和10）年頃には、砂沢市太郎・間見谷ベラモンコロ夫妻も、阿寒湖で熊の木彫りを始めている。夏は阿寒湖畔、冬は旭川という生活であったという（金倉 2006: 453-9）。

ただし、戦時体制下になると、近文でも、軍隊や徴兵に駆り出される者が多くなっていった。残った者のいく人かは空襲警報が発令されれば防空壕に入り、解除されれば穴から出て木彫り熊を彫った。軍都旭川には軍人や軍需関係者の出入りがあった。また、非常事態であるからこそ安らぎをもとめた民芸品の需要があった。とはいえ、平和産業としてしか通じない熊彫りをしている者は非国民視されていた（相川 2002; 石島 1981）。前述の松井梅太郎も徴兵は免れたものの山から木を伐りだす軍関係の仕事に従事しており、木彫りの仕事はほとんどできなくなっていた

(木村 1999: 201)。

戦時体制下に限らず戦前においては、谷本（2009）が指摘する、近文アイヌは、前述の手工芸品制作と並行して、伝統的用具などの作成が叶う環境を担保し次代へ伝えていったという点にも留意する必要があろう。そこでは、佐々木ほか（2008）に所収されている「北海道大学植物園所蔵アイヌ資料目録」にもとづき、北海道大学植物園に所蔵されているアイヌ資料のうち、旭川市近文で作成されたことが明記されているものが120点含まれていること、収集年代は1930～1950年であり戦前期を生きた近文アイヌの人々が育んだ文化が反映された資料とみてよいことが指摘されている。その上で、そのアイヌ資料の種類としては、鮭皮靴、イクパスイ（棒酒箸）、花矢（イオマンテで使う矢）、狩猟用罠、ゴザ、ヌサ、イナウ、刀帯、タヌキ頭骨、丸木舟模型などが含まれていると指摘している。

## 第2節 戦後におけるアイヌの人々による手工芸の動態

### 第1項 木彫り民芸品産業の盛衰

終戦後、物資不足の中で、1947（昭和22）年には近文のわずかな農地では食糧難をしのげず川村カ子トらは、神居村上雨紛に戦後開拓として集団入植していた。そこでは、開墾と炭焼きがもっぱらの仕事だった（金倉 2006: 479-80）。また、そうした中で、木彫り熊を彫る技術がある者は細々と熊を作り出し、農家などと物々交換などをしていた（木村 1999: 256）。ちなみに、三好（1969）による杉村キナラブックの生活史によれば、キナラブックは物資不足の中で紙の原料として需要があった、さびた（ノリウツギ）の木皮を取り生計をたてていた。

しかし、アメリカ兵が旭川に進駐したことが、こうした状況に変化をもたらした。戦災にあわなかつたためにデパートや小売店に木彫り熊や民芸品が出ており、アメリカ兵がみつけて興味をもった。売り場では通訳もつけられていた。アメリカ兵は、熊に部隊名などを彫らせ、パイプ・スプーン・キャンドルスタンドなどの実用品も求めた。また、米軍進駐司令官の民芸品への要請もあり米軍の中のデザイナーに指導を受け、戦時中活動が停滞していた前述の「アイヌ民芸協会」の活動も活発化し、輸出品制作の試作などが行われた（相川 2002; 石島 1981; 木村 1999: 256-7; 村上 1959）。また、1948（昭和23）年には、「アイヌ民芸協団」が発足してもいる（金倉 2006: 481）。

進駐軍がいなくなった後、日本経済が回復していく中で、北海道観光が急増し、観光土産品としてのアイヌ民芸品の生産も定着していった（木村 1999: 257, 376）。杉村フサは、子どもができた1952（昭和27）年頃、チタラベ（花ゴザ）が売れるというので、母親（杉村キナラブック）が編むのを見よう見まねで覚え、市内の民芸品店へ持っていったと述べている。なお、杉村フサはこれを1963（昭和38）年頃まで行った（北海道教育委員会 1993: 173）。

また、1953（昭和28）年には、アイヌと和人が協調しアイヌ民芸品を家庭の内職として制作する「企業組合北海民芸舎」が組織された。理事長には後に旭川市長になる五十嵐広三が就任した。昭和30年代（1955年～）に入ると、工房に専属の職人を十数名おき、組合加入者は主婦を中心に200人以上にのぼった。製品は、アットウシ織が60%、木彫り熊25%、その他アイヌ人形が15%であった。当時の北海道の観光土産品、とくに木彫り品のほとんどは長野県松本市で町をあげて制作され、全国に供給されていた。アイヌ細工でさえも、阿寒や登別等の土産物店では長野県産で占められていた。こうした事情もあり、木製品よりもアットウシ織地にアイヌ文様を配した着物・ハンド

バック・敷物・ノレンなどが制作されていた（木村 1999: 260, 376-7）。

このアットウシ織については、高価なシナノキのものは二風谷から買い付けをしていた。旭川でアットウシ織の需要があることがわかると、二風谷からアットウシを持ち込む者も増えていった。二風谷ではアットウシ織の生産者が増えると、中学校の授業にアットウシ織の実習が取り入れられ、アイヌの人々が計画的にアットウシ織の増産に取り組むまでになった（金倉 2006: 509）。二風谷との関係でいえば、萱野茂は、五十嵐広三について、熊彫りの講師を二風谷に派遣してくれたことや、二風谷産のアットウシ織を買い取ってくれたことがあったと言及し、そのために二風谷に木彫りや織物が根付いたとしている（北海道新聞朝刊1994年11月23日【30】）。川上・伊井・前（2005: 年表10）にも1962年（昭和37）に平取に旭川から講師を招いたという記述がある。なお、その他の地域との関係でいえば、たとえば、白老では、1950（昭和25）年にはすでに旭川から木彫り熊を仕入れ販売しており、1955（昭和30）年には旭川から木彫りの指導者を招いていた（川上・伊井・前（2005: 年表9））。

「企業組合北海民芸舎」について、さらに注目しておくべきは、需要に合わせて、熊ボッコ、糸あやつりアイヌ、アイヌ置人形、アツシ形状差、アイヌボッコ、アイヌ文様染物など新製品も生み出していったことであろう。とくに熊ボッコは20年以上のロングセラーとなった。ただ、当初は採算が取れてはいなかった。しかし、そうした新製品の模索を背景に、1958（昭和33）年ころから国際見本市へ出店し横浜アメリカ領事館賞を得たことなどを契機に経営は黒字となった。1960（昭和35）年頃には、専属職人月平均15,000円、内職の会員も1日2～3時間の仕事で2,000～6,000円の収入を得ていた（木村 1999: 260, 376-7）。また、村上（1959）によれば、加入しているアイヌの人々30名では足らずに、1月～5月の最盛期には200人からの和人を動員していた。

木村（1999: 377-8）には、当時の状況を示す北海タイムス（1959（昭和34）年10月30日）の記事が掲載されている。それによれば、本州とくに長野県産だった木彫り熊などの民芸品への需要の約40%を道内製品でまかなうようになり、そのうち7割が旭川で生産されていること、市内の民芸みやげ品の生産者は約40業者で1業者あたり平均の売上は120万円を超えており、20～30人の職人を使用している3業者以外は家内工業でありそれゆえかなりの収入になること、アイヌの人々は約70%であること、人気の中心は木彫り熊で総売り上げの半分を超えていることなどが記述されている。

また、当時の動きとして指摘しておくべきは、1958（昭和33）年に、アイヌ系の木彫家5人が共同出資をして、「アイヌ民芸協同組合」を結成し、アイヌ民芸製作所を設けたこともあろう。ここでは木彫り熊の生産が主体で、流れ作業の方法で量産工場としての性格をもった（木村 1999: 378）。この組合には、市からの運転資金や販路拡大に関する援助があった（村上 1959）。

この時期のアイヌの人々の生計手段を、村上（1959）に記載されている「近文アイヌ職業調」（1957（昭和32）年6月現在）から概観しておくと、記載されている全83戸の中で、「木彫（熊）業」とされている戸数は23であり、「専農」の16、「日雇い」の14を超え、もっとも多くなっている。さらには「農業兼木彫（熊）」が2戸、「大工兼木彫（熊）」が1戸という記述もみられる。この点をみれば、この時期の旭川のアイヌの人々にとって木彫りは、生業としてもっとも重要な位置づけであったと判断できよう。なお、小坂（1994: 60-2）には、その頃、杉村京子は、タケノコやフキの採取販売、あんころもちの販売、川村カ子トアイヌ記念館で解説の仕事、

木彫りの仕事等をしていたものの、徐々に木彫りの腕をあげ民芸品を売って生活できるようになつていったと解釈できる記述もある。

「企業組合北海道民芸舎」に視点を戻すと、昭和30年代中期から、旭川の特産品である優佳良織の普及とともに、「企業組合北海民芸舎」の女性の中でも優佳良織の制作に従事する者が多くなつていった。また、1960（昭和35）年には「株式会社北海道民芸品」に改組、アイヌ民芸センターと呼ぶ工場を設置した。そこには、木彫り製作者の中には、夏に観光地に出稼ぎに行く者も多く、それを背景に安定的な販売を実現する意図があった。この頃から、主要な生産物がアツトウシ織からアイヌの木工芸品に移り、1963（昭和38）年に五十嵐広三が旭川市長に就任するに及び、前述の平塚賢智を顧問に迎え、熊彫りを中心とする木彫品生産を進めた（木村 1999: 377; 小坂 1994: 88）。

この間、1961（昭和36）年には、旭川市・旭川郷土民芸みやげ品協会・旭川民芸品販売協会主催により近文のアイヌ民芸センターで、木彫り熊の品質改善と生産技術向上を意図した「旭川木彫熊彫りコンクール」が開催されている。翌年の第2回からは、コンクールの対象を木彫り熊から木彫り全般に拡大したためか「旭川木彫コンクール」と改称、1972（昭和47）年には「旭川木彫技能競技会」へと再改称した（木村 1999: 473）。

また、昭和30年代（1955年～）には、日本経済の成長は戦後の観光ブームをもたらしていた。たとえば、上野発「北海道一周観光列車」が青函連絡船を乗り継いで道内観光地を7～10日で回った。当時の観光土産品としては、食品は長時間持ち歩いても変質しないものだけであったこともあり圧倒的に木彫り民芸品だった。木彫り熊、アイヌ人形、アイヌ文様の盆など飛ぶように売れた。製品を全道に配置する専門問屋も誕生した（相川 2002）。

こうした観光ブームをうけて、一家の平均月収が7万円前後といわれていた1964（昭和39）年ごろには、近文の1人の彫り師の月収は6～7万円になるともいわれた。先に触れたように多くが家内工業であるため家族の働き手の分だけ収入があった。近文の人々は6軒に1台自家用車を持っていると評判になったほど作っただけ木彫り熊は売れた（石島 1981; 木村 1999: 379）。

昭和40年代（1965年～）の初めの頃には、旭川市内に木彫りで生計を立てている人は和人も含めて400人弱も存在していた（北海道教育委員会 2011: 62）。1965（昭和40）年には、「旭川アイヌ民芸品販売協会」が設立され、初代会長に五十嵐広三が就任している。さらに、同年、旭川民芸品を本州に宣伝するために旭川「開基」80周年記念行事の一環として「開基80周年記念旭川民芸祭」が東京上野の松阪屋デパートで開催された。そこでは、熊の木彫りなどの伝統的民芸品や実用的クラフト民芸品を集めた展示即売や、アイヌの唄と踊り、木彫り実演会、アイヌ衣装を着ての写真撮影会などがなされたようだ（木村 1999: 472-3）。こうした点をふまえ、五十嵐（1970: 212）では、民芸品の生産は旭川市の産業の一分野として育ったと評価されている。

実際、木村（1999: 469-70）では、1971（昭和46）年4月の北海道新聞の記事をもとに、当時も旭川の民芸品業界は好況であったと記されている。さらには、1973（昭和48）年の11月の北海道新聞にもとづき、民芸品ブーム・観光ブームに乗って旭川市内の民芸品メーカーは、売上高は年率10%以上の伸びと活況に入っているとも指摘されている。1970（昭和45）年前後頃は「彫れば月150万円稼いだ」と回顧する者すらいる（北海道新聞2013年3月12日朝刊全道（社会）【30】）。

この頃のアイヌの人々の職業について、荒井（2013: 213）には、1972（昭和47）年において、

近文のアイヌの人々の総戸数が66戸であり、職業別にみると民芸品制作や販売が33戸、専農が15戸、その他（雑貨商、運転手、店員、工員、大工、調理師、公務員）が18戸であるという記述がある。これを、先に触れた「近文アイヌ職業調」（1957（昭和32）年6月現在）と比較してみると、仮に「近文アイヌ職業調」の「木彫（熊）業」と、ここでの民芸品制作や販売がほぼ同一のものと判断できるとすれば、旭川のアイヌの人々にとって生計手段としての手工芸品制作や販売の意味が1950年代後半～1970年代前半にかけて大きくなってきたと判断することができる。

こうした1950～1970年代前半までの状況を、インタビュー協力者の語りからもいくつか確認しておこう。たとえば、「両親は熊彫り、母親はアクセサリーも作っていた。そのため、小さい頃から木彫りや刺繡をいつも目にしていた。小学校5～6年生（おおよそ1960年代前半）頃には手伝いをしていた」と述べる者や「父親はお土産品として熊彫りをしていた。母親はそれに毛並みをつけたり、刺繡をしたりしていた」と述べる者がいる。さらに、「1960年代後半から1970年代初めの頃、店で実演販売をしていた。10月くらいから春までは物産展回りをした。地方を13年くらい回った」という語りや「1970年代頃、民芸品店で働き、ヘアバンド、着物などあらゆるものに刺繡をして売っていた。1970年代中頃までは作るものが追いつかないほどよく売れていた。当時、まわりはみんな民芸品に関わっている人ばかりだった」と回想をする者もいる。

こうして1976（昭和51）年頃には木彫り民芸品産業の最盛期を迎えた。北海道新聞朝刊全道（社会）2013年3月13日【30】によれば、1975（昭和50）年頃、旭川の木彫り業の年間売り上げの半数以上が熊だった。しかし、昭和50年代後半に入ると、低成長期に入り景気の後退が始まる。こうした状況は旭川の木彫り民芸品業界も例外ではなかった。先に触れたように家内工業が主の業界であるため、好況時は家族労働力やパート労働力に依存し、不況時にはこれら臨時雇用の調整が行われるため、不況に対して抵抗力が強い性格をもつ。にもかかわらず、企業数、従業者数、生産高すべてにおいて1976（昭和51）年から1982（昭和57）にかけて低下している。具体的には、企業総数は65から55に、従事者数は520人から291人に、生産高も149156万円から112574万円となった（木村 1999: 471-2）。

こうした変化の背景の1つには、品質を問わずに量産してしまったことがあった。それほど需要が多かったともいえる（川上・伊井・前 2005: 8）。また、市場が広がっても作り手の数には限りがあり、それも品質が低いものが製品として流通した背景にあった（相川 2003）。そうすると、製品としての魅力が弱まり、価格が下がり、採算もそれなくなるだけでなく消費者も敬遠するという循環が生じる（川上・伊井・前 2005: 9）。北海道新聞朝刊2013年3月13日【30】でも、木彫り熊は質より量を問屋に求められ大量に市場に出回りいつしか飽きられたと整理されている。他方で、消費者の選好変化を背景に食品やキャラクター商品その他の観光土産品の魅力が強まったという事情もあった（相川 2003）。とくに食品に関しては、流通網の発達や商品開発技術の向上があつただろう。このように木彫り民芸品業界内部のダイナミズムと市場環境変化によって木彫り民芸品の社会的位置は変化していった。

たとえば、この間、木に関する産業の中では木工クラフトが急速な拡大をみた。北海道新聞夕刊道央1995年2月18日【11】には、「旭川の木の産業 家具だけじゃない 小木工が元気だ 木彫のクマに代わり実用的クラフト台頭 全国のブランド確立へ業界結束」という見出しの記事が掲載されている。それによれば、旭川の木工クラフトは、1974（昭和49）年には4400万円の生産

であったものが1993（平成5）年度には約10億円の生産となったのに対して、土産品木製品の年間生産額は、1975（昭和50）年頃の約11億円から物価上昇にもかかわらず、ここ数年間は9億円前後にとどまっていると評価されている。

2000年代以降には、こうした傾向がより一層強まる。北海道新聞朝刊全道2007年5月6日【2】には、1970年代には生産額が年間10億円を超えた木彫り工芸品も、需要の多様化を背景に2005（平成17）年には8500万円まで減り、木彫り工芸品作りに携わる人も、現在は20社30人にとどまる、という記事がみられる。元北海道アイヌ協会旭川支部長で、北海道アイヌ民芸品コンクール・アイヌ民芸品作品コンテストで様々な受賞経験があり、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構から伝統工芸家として表彰されている川上哲<sup>4)</sup>も川上（2012）で、ベトナム製品が出てきて約10年前から売り上げが落ちてきたと述べている。

そうした結果、北海道教育委員会（2011: 61-2）によれば、現在旭川市内での木彫りの専業者は16人ほど、そのうちアイヌの方は1人となった。また、そこでは、刺繡についても言及されており、刺繡についてアイヌの方が8名ほどあげられていると解釈できる記述があるものの、それだけでは暮らしていくのは難しいとも評価されている。

このように、戦後、アイヌの人々の生業として大きな意味をもつだけでなく、旭川市の産業としても大きな位置を占めた木彫を代表とした手工芸は、社会の変化の中でその位置や意味を大きく変容させていった。

## 第2項 文化伝承活動の展開

とはいっても、旭川のアイヌの人々の手工芸は、こうした産業との関係の中でのみ営まれてきたわけではなかった。具体的には、文化伝承という文脈でも手工芸に関する実践や取り組みがあった。

たとえば、1951（昭和26）年には、博物館という発想があったと評価される入場無料の「川村カ子トアイヌ記念館」が「復活」した（金倉 2006: 487-8）。

この頃の状況を、インタビュー協力者の語りからみておくと、たとえば、「祖母は入れ墨、耳輪をしていた。祖父母世代では入れ墨をしている人はいたが、親の世代では入れ墨をしている人はもういなかった。イナウを捧げることはあった。両親も祖父母もみんなアイヌ語が使えた。

（しかし）両親はアイヌ語もアイヌのことも子どもたちには教えなかった」と述べる者や、「父親はストーブの火や水に対してカムイノミのようなことはしていた。夫婦喧嘩をする時はアイヌ語を使っていた。祖母は入れ墨をしていた。入れ墨をしているから出歩かず、ずっと家に居た」と述べる者がいる。さらに、「明治生まれのおばあちゃんたちがよくみんな集まってゴザを編んだり、カゴを編んだりしていた。おばあちゃんたちが話している時はアイヌ語だったが、自分が『ただいまー』と帰ってくるとピタッとアイヌ語をやめて日本語で話していた。母親も同じでアイヌ語は教えてもらえなかっただらしい」と語る者もいる。

1960（昭和35年～）年代に入ると、1964（昭和39）年8月には、アイヌ文化の保存と伝承に貢献することを企図し、アイヌの人々の文化遺産を継承・保存・紹介していくという事業の起点としての「北海道アイヌまつり」が開催された（五十嵐 1970: 233-4）<sup>5)</sup>。その際には、先に触れたようにこの時期旭川のアイヌの人々は民芸みやげ品の制作に従事している者が多く繁忙期であったものの、仕事を休んでチセづくりや丸木舟づくりの準備をしたという（五十嵐 1970: 236）。手工芸に関

していえば、そこでは、木彫りコンクールや民芸品即売会などが行われている（五十嵐 1978: 200）こうした流れの中で、1966（昭和41）年に、杉村キナラブックが旭川市文化賞を受賞した。1947（昭和22）年に制度ができて以降、これがアイヌの人々が受賞したのが初めてのことだった。受賞の対象となったのは、手工芸、具体的にはチタラベ（花ゴザ）、サラニップ（籠）、カムイタラ（神の荷縄）、エムシアツ（刀吊帶）などであった。1967（昭和42）年に、昭和天皇の来旭の折には、杉村キナラブックが作ったケトシ（身まわり品いれ）とタラ（荷縄）が旭川市から献上された（五十嵐 1970: 240-2）。小坂（1994: 78-91）によれば、その前後から、杉村キナラブックから杉村京子へとアイヌ文化の伝承がなされ始める。たとえば、1965（昭和40）年の頃にはアイヌ式の糸のより方の教授がなされ、1966年（昭和41）年にはタラ（荷縄）の作り方の伝承が始まった。その後、杉村京子は古い作品を博物館でみることや、本に掲載されている昔の手工芸品を虫眼鏡で調べることなど、作り方を研究し始める。なお、旭川市は、1967（昭和42）年にはユーカラやツイタク（昔話）を無形文化財に指定し、その保持者として杉村キナラブックを認定している。また、同じく1967（昭和42）年には、アイヌ本来の狩猟とそれにともなうカムイノミやチセづくりの技術を伝承している尾沢カンシャトクが北海道文化財保護功労者として表彰された（五十嵐 1970: 240-2）。

1967（昭和42）年には、旭川龍谷高等学校郷土部が「上川アイヌの研究」に着手し始めた（旭川龍谷高等学校郷土部 1990）。こうした活動に、先に触れた尾沢カンシャトクや杉村キナラブックなどが文化伝承者として協力を始める（福岡・本間 2008ab）。

さらに、1969（昭和44）年から造成が着手された（五十嵐 1970: 245）、旭川市博物館分館「アイヌ文化の森・伝承のコタン」が1972（昭和47）年に開園された（吉田 1989）。開園後1年を過ぎた頃、松井（1983: 15-24）は以下のようない記述をしている。「アイヌ文化の森・伝承のコタン」では、観光地にみられるような施設や売店がないようにするための努力がなされた。その背景には、観光業者の多くがアイヌ文化を金儲けの手段としてあつい、しかもでたらめを見世物にし、歪められたアイヌ観の温床になっているという認識があった。「アイヌ文化の森・伝承のコタン」は、アイヌ文化を正しく再現し保存と伝承に努めるいわば学習の場である。そこでは、博物館や後述の旭川アイヌ協議会主催のアイヌ語やチタラベ（花ゴザ）やサラニップ（手さげかご）などの伝承講座がなされている。五十嵐（1978: 205）では、こうしたアイヌ文化の保存と伝承の場を持っているのは北海道で旭川だけという評価がなされてもいる。

1972（昭和47）年には、第1章で触れられている「旭川アイヌ協議会」が結成された。その初代会長である門別薰によれば、北海道旧土人保護法の即刻廃止、民族文化の伝承保存、親睦の三本柱で協議会を作ったという（門別 1995）。発足の際、民族文化の伝承保存のための伝承部長には杉村満が就任した（杉村満エカシ追悼誌発行委員会編 2002: 84）。杉村満は、先に触れた尾沢カンシャトクの息子であり、彼ら没後は、妻の杉村フサとともに前述の旭川龍谷高等学校郷土部の活動に伝承者として積極的に協力を行うことになる（福岡・本間 2008ab）。また、「旭川アイヌ協議会」は、1974（昭和49）年には「アイヌ文化伝承と工芸展」を開催し始める（北海道新聞朝刊地方2010年10月31日【22】）。なお、同年からは、「アイヌ文化の森・伝承のコタン」で自然の神々に感謝し先人の偉業をたたえる「チノミシリカムイノミ」も開催されている（北海道新聞朝刊道北1997年5月19日【22】）。

他方で、1974（昭和48）年には北海道ウタリ協会旭川支部（現：旭川アイヌ協会）が組織された。杉村京子がこの初代支部長を引き受けた（小坂 1994: 132）。そうした点を背景に、社団法人北海道ウタリ協会（1981）からは、雇用安定とともに文化伝承を意図する試みと解釈できる「昭和55（1980）年度短期機動訓練」が旭川市で開催されていることがわかる。具体的には、講師を杉村京子とし、古くからの鎖り抜き技術によるオンコ箸・茶さじ・衣紋掛けの制作技術の取得が目指され、受講生が11名参加した。なお、そこでは、講習前には鎖り抜きを活用した民具製作は45歳以下ではいなくなっていたこと、しかしこの事業により制作技術者の年齢が23歳までに広がったという記述がある。また、小坂（1994: 162）には、1993（平成5）年1月現在で、杉村京子は、北海道立旭川高等技術専門学院の木材工芸科機動職業訓練の講師を10年以上勤めていること、また講座の内容は年ごとに木材工芸と刺繡の交互を繰り返してきたという記述がある。このようにみれば、少なくとも1980年代には、北海道ウタリ協会旭川支部を背景に、手工芸の機動訓練がなされていたといえる。

さらに、1988（昭和63）年頃には、「旭川アイヌ協議会」主催の「民俗アイヌ伝承教室」が開催されていると判断できる新聞記事もある（北海道新聞朝刊道北1998年3月8日【26】）。それによれば、1998（平成10）年現在では草木織りと木彫りの技術の講習がなされている。また、1989（平成元年）には、杉村京子は、ユーカラ伝承と伝統工芸で旭川市文化奨励賞を受賞している（杉村 1995）。

なお、1980年代において、文化伝承という文脈では、1984（昭和59）年にアイヌ古式舞踊が重要無形民俗文化財に指定された折に「旭川チカッピニアイヌ民族文化保存会」が保護団体とされており（社団法人北海道ウタリ協会 1984）、また1985（昭和60）年には、旭川では1957（昭和32）年以来28年ぶりに略式ではない形でイヨマンテ（イオマンテ）が行われてもいる<sup>6)</sup>（イヨマンテ実行委員会1985）。さらに、1987（昭和62）年には、北海道の助成により平取とともに旭川で「アイヌ語教室」が開講された（社団法人北海道ウタリ協会 1988）。

1990年代に入ると、北海道新聞朝刊道北1996年12月6日には、1993（平成5）年以来3年ぶりに旭川市で「機動職業訓練」が開催されたという記事がみられる。そこでは、ウタリ協会に属する市内の10名が民芸品作りの技術を学んだ。また、この間、先述の「アイヌ文化伝承と工芸展」も継続的に実施されていた。たとえば、1994（平成6）年には第12回、1996（平成8）年には第13回、1998（平成10）年には第14回が開催されている。第13回には、伝承部門でチタラベ（花ゴザ）が、工芸部門でシマフクロウが市長賞を受賞している。また、第14回には前回の出品数が約250点だったものが今回は350点程度が出品され、最近ではアイヌの人々以外の出品者が全体の4割程度を占めるようになってきていることから伝承工芸への関心が高まっていると評価されている（北海道新聞朝刊道北1994年7月21日【22】、北海道新聞朝刊道北1996年4月20日【27】、北海道新聞朝刊道北1998年4月14日【9】、北海道新聞朝刊道北1998年4月19日【26】）。

アイヌ文化振興法施行後の1997（平成9）年には、第1回アイヌ文化奨励賞を杉村満が受賞している。受賞理由は、伝承を目的とした木工芸の技術指導講師を務め、木工芸の授産奨励に成果を収めた点、「旭川アイヌ協議会」伝承部長として、アイヌ各儀式や祭礼の指導、笹ぶきチセ、丸木舟、仕掛け弓等の狩猟用具の制作指導などの伝承・保存などであった<sup>7)</sup>。なお、杉村満エカシ追悼誌発行委員会編（2002: 表紙裏, 15, 84）からは、杉村満は1928（昭和3）年生まれで、小さい

頃から近所の人が家に集まり日用品などを作っていたため両親などの作業をみて知らず知らずに手順を覚え民族の伝統工芸を伝えられること、30歳（1958（昭和33）年）くらいから実際に工芸品を作り始め最初の10年ほどは熊彫りなどの民芸品を制作していたこと、前述の「アイヌ文化の森・伝承のコタン」開園時期（1974（昭和49）年）には民芸家としてアクセサリー等を彫っていたこと、しかし、昔アイヌが実際に使用していた道具を復元させたいという思いが強くなり、觀光品としての色合いが強い民芸品作りをやめたこと、それ以降は、道内の博物館に資料として展示される木工芸品を作っていることなどがわかる。

また、1998（平成10）年には、杉村京子がアイヌ文化賞を受賞している<sup>8)</sup>。杉村京子は、この間も講習会の講師等として活動している。たとえば、北海道新聞朝刊道北1998年6月23日【23】によれば、アットウシやチタラベ（花ゴザ）の織り方やアイヌ文様刺繡などを学ぶ講習会が杉村京子を講師として開催されている。

2000年代に入ると、2001（平成13）年には杉村フサがアイヌ文化奨励賞を受賞した<sup>9)</sup>。杉村フサは、旭川アイヌ語教室の講師や旭川市生活館事業のチタラベ（花ゴザ）の講習会の講師等をしてきた。北海道新聞朝刊道北2002年11月14日【27】にも、旭川市博物館で開かれたチタラベ（花ゴザ）の体験学習の講師として活動している記事がある。また、2000年代においても「アイヌ文化伝承と工芸展」が開催されてきた。たとえば、2002年に第16回、2009年に第19回が開催され、一般市民が作成したアイヌ文様が施された織物やタペストリー、手編みのかご、チタラベ（花ゴザ）、木彫りのクマやフクロウなどが展示された（北海道新聞朝刊地方2002年5月11日【23】、北海道新聞朝刊地方2009年3月22日【24】）。

ただし、この頃には、後継者不足や高齢化が懸念されるようになる。北海道新聞朝刊地方2008年5月14日【24】には、「アイヌ文化伝承者45名 後継者不足で高齢化も 市教委初調査」という見出しの記事がある。それによれば、市教委が「旭川アイヌ協議会」と「北海道ウタリ協会旭川支部（現：旭川アイヌ協会）」の協力のもと、「旭川版イオル構想」を7年ぶりに見直す際の基礎資料としてアイヌ文化の伝承活動に取り組んでいる者の実態調査を行った。その結果、伝承者の実人数は45名で大半はアイヌの人々であり、市内の伝承活動は、アイヌ語教室・民族衣装講座・伝統儀式の開催などでなされていることがわかった。分野を詳細にみると、言語・口承文芸13人、衣服12人、工芸16人、儀式・風俗13人、食文化15人、舞踊・音楽19人、信仰観10人、住文化17人、習慣・知識4人であり、重複分野を伝承できる者も少なくない。ただし、平均年齢は60歳を超えており高齢化の問題と、伝承活動と仕事などとの両立の困難さから若い後継者の確保が難しいとの評価がなされている。また、北海道教育委員会（2011: 61-2）では、伝統的な旭川のイナウケ（木幣作り）も3名ほどしかいないという記述がある。

インタビュー協力者の語りをみると、これまで確認してきたような祭事や講演会に、参加している/したことがあると回答する者がみられる。たとえば、「チノミシリカムイ」や踊りや刺繡などの講習会や教室に参加している/したことがあるという語りがみられる。また、儀式の時にイナウを削ったり彫ったりしていると述べる者や、カムイノミ、先祖供養、イナウを捧げるなどは「旭川アイヌ協議会」で全部やっているという語りをする者もいる。さらに、アイヌ伝統刺繡のアドバイザーや講師になっている者もいる。

ただし、インタビュー協力者の語りからも、後継者不足が指摘されている。たとえば、「後を

継ぐ人がいない。旭川には旭川の刺繡があるが、途絶えてしまう」「ゴザとカゴの作り方を継いでほしいと思うが、若い人は仕事優先でなかなかできない」などの語りがみられた。

### おわりに

以上をふまえて、最後に、アイヌの人々の手工芸が持つ／持っていた機能や意味を検討してみよう。

まず、第1に、アイヌの人々の手工芸は、彼らの生計手段としての機能や意味があった。その代表的なものは、戦後1950～1970年代に隆盛をみた木彫り民芸品だろう。その時期には多くの近文アイヌの人々にとって主要な生計手段といえたのであった。

ただ、こうした手工芸は、戦前においても副業的な位置づけながら生計を支える手段であった。そして、それは、明治から昭和に時代を経るごとに、生活の上での重要性を増してきていた。その意味において、戦後の木彫り民芸品の隆盛は、戦前から連綿と続く営みを背景にして成立したといってよい。その際には、主要な手工芸は、茶盆・衣紋掛・アイヌ人形・熊彫りなどと時期に応じて変容していた。戦後においても、「企業組合北海民芸舎」は、主要製品をアットウシ織から木彫り熊へと変化させていた。さらに、木彫り民芸品産業が下火になった後も、刺繡などの仕事で生計を得ている人もいる。このように、時代によってその重みは異なるものの、手工芸は近文アイヌの人々にとって生計手段としての機能や意味をもった。

また、第2に、この点と関連して、アイヌの人々の手工芸は、旭川自体の産業形成にも寄与した。先に触れたように、1970年代後半以降には下火になっていたものの、木彫り民芸品生産は旭川市の産業の一分野として育っていたのであった。こうした点は、アイヌの人々が行っていた手工芸に、和人も参加していったことをも意味しよう。たとえば、戦前でも、平塚叡智のようにアイヌの手工芸が商品化され始めたほぼ当初からアイヌの木彫り熊を生業とする者がいた。また、同じく戦前の「アイヌ民芸協会」には和人も参加していたのであった。戦後も、五十嵐広三が理事長の「企業組合北海民芸舎」で和人も働いていただけではなく、それ以外にも木彫りで生計を立てている和人がいた。しかも、2010年代以降木彫りの専業者が少なくなってきた中においては、専業者は和人の方が多くなってもいた。

こうした点は、第3に、旭川市の政策や制度の形成にも影響を及ぼしたと考えられる。それは、象徴的には、五十嵐広三が旭川市長になったことに示されている。しかし、五十嵐広三という1人のリーダーシップによってのみ、たとえば、「北海道アイヌまつり」、杉村キナラブックの旭川市文化賞受賞、「アイヌ文化の森・伝承のコタン」等が成立したとは考えにくい。こうした五十嵐広三の考えを支持し共鳴し、さらには発展させる多くの者の存在が不可欠だろう。この点について、木彫り民芸品が旭川の主要産業となりつつあり、実際にそうなったことは大きく関係していると考えられる。すなわち、こうした産業形成は、木彫り民芸産業だけではなく、さらにはアイヌの人々に対する政策や制度を支持するよう和人の政治的選好や態度を涵養していくと考えができるのではないか。

ただ、こうした旭川市の政策や制度も、戦前からの流れがあった。たとえば、戦前には、旧土人保護事業の一環としての性格はもちつつも、旭川市はアイヌの人々が制作した製品を買上げて副業として奨励振興していたのであった。また、「旭川アイヌ手工芸組合」も、旭川市社会課主

導で立ち上げられたものだった。こうした戦前の政策や制度の意図については、様々な評価がなされ得よう。しかし、戦前から、アイヌの手工芸を奨励振興していたという旭川市の政治的経験は、戦後のとくに五十嵐行政のあり方の素地になったとみることもできよう。

さらに、第4に、とくに戦後の木彫り民芸品という手工芸は、旭川市の文化伝承活動のあり方にも影響を与えてきた。それは、1960年代において木彫り民芸品が産業として隆盛を極めつつあった時期に、アイヌ文化の保存と伝承を企図した「北海道アイヌまつり」が実施されたことに象徴的に示されているように、こうした経済的な側面が文化伝承活動を可能にさせたという側面があったことにとどまらない。

たとえば、観光などのアイヌ文化を産業にしようとする試みは、つとに批判の対象となってきた。それは、おそらく旭川の木彫り民芸品産業においても当てはまろう。この点をふまえれば、いわば観光や産業のカウンターパートとしての文化伝承という意味付けや実践が旭川でも生起していたと考えることもできるのではないか。すなわち、産業としての成熟がみられたからこそ、逆説的にその対抗としてのアイヌ文化の伝承活動も生起してきた側面もあると考えられるのである。実際、旭川市博物館分館「アイヌ文化の森・伝承のコタン」は観光利用への批判から設立されたのであった。

さらには、特段の意味合いをもたず生計として木彫りなどの手工芸の制作を続けていく中で、アイヌ文化やその伝承継承への興味や関心が深まっていったという経路も考えられる。たとえば、北海道教育委員会（2011: 61-2）には、当初、観光土産品の技術を身につけそれで良いと考えていたものの、古い写真や図録を見て、もう一度奮起し、基礎からやり直すべきと考えて本物から学びながら今でも勉強を続けていると述べる者もいる。この点は、観光土産品用の木彫りの技術が身についたからこそ、アイヌ文化の魅力やその伝承活動の重要性に気づいたという経路が存在したことを示唆しているのではないだろうか。

その上、第5に、旭川の手工芸はそれが産業となったということも含めて、他地域のアイヌ文化伝承活動にも影響を及ぼしたと解釈することもできる。たとえば、戦前では、砂沢市太郎・間宮ベラモンコロが阿寒湖で熊の木彫りを始めたのであった。また、戦後には、白老では旭川から木彫り熊を仕入れるだけでなく、木彫りの指導者も招いていた。さらに、平取では、旭川によるアウトゥシ織の仕入れや木彫りの講師派遣などから二風谷で木彫りや織物が根付いたとも評価されていたのであった。その意味において、旭川の木彫り民芸品とその産業は、戦前戦後を通じて、他の地域のアイヌ文化伝承活動にも影響を与えた。

2019年4月には、「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が成立した。このアイヌ新法では、法律で初めてアイヌ民族を先住民族として位置づけている。と同時に、交付金制度創設などを通して、従来の福祉・文化政策から、地域振興を含む総合施策に踏み出す転換点になると位置づけられてもいる。その交付金制度は、アイヌ文化継承や観光振興などにつながる事業を含んだ地域計画を策定した市町村が対象となっている（北海道新聞朝刊全道（総合）2019年4月20日【1】）。この点をふまえれば、今後、特定地域を対象としてアイヌ文化継承や観光振興の実態を明らかにすることには重要な意味があろう。ただし、それだけではなく、これまでアイヌ文化継承や観光振興を行ってきた特定地域の歴史やそれをふまえた現状を明らかにしていくことも重要な課題となるだろう。その意味で、本章の試みは、こう

した課題の一端に取り組むものとして位置づけることができよう。

とはいっても、いずれにせよ、特定の地域を対象にしつつアイヌ文化の具体的な動態を明らかにする試みは、重要な意味をもつといえるのではないだろうか。

#### 注

- 1) なお、こうした旭川の軍都化は、売買春経済の広がりなどの他の社会的な影響ももたらしている（越田 2012）。
- 2) 金倉（2006: 420）には、この「近文協同経営組合」は、旭川市が管理しつつある積立救恤金残額約6,000円の交付を陳情する予定であったこと、しかし、旭川市から実際にいくら交付されたかは確認できなかったことが記載されている。
- 3) 荒井源次郎・ミチの子どもである荒井和子によれば、「アイヌ細工は母しかできない。どんなに頑張っても注文に応じられなくなり、旭川から、母の兄弟や、親類を呼び、大家族になった」（荒井 1993: 148）、「アイヌ民芸品が飛ぶように売れ、〈中略〉、母は旭川から熊を彫る若者二人を頼んで、連れてきた。」（荒井 1993: 167）という。なお、荒井源次郎・ミチは、1943（昭和18）年の秋に旭川に戻っている（荒井 1993: 267, 272）。
- 4) 公益財団法人アイヌ民族文化財団のHP (<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/2160.html>) 参照。
- 5) 「北海道アイヌまつり」については、本報告書の第1章を参照のこと。
- 6) ちなみに、小坂（1994: 231）には、1967（昭和42）年頃までは、イヨマンテは毎年どこかの家でやっていた、それこそ1年に5～6軒ということもあったという記述がある。
- 7) 公益財団法人アイヌ民族文化財団のHP (<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/970.html>) 参照
- 8) 公益財団法人アイヌ民族文化財団のHP (<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/1072.html>) 参照
- 9) 公益財団法人アイヌ民族文化財団のHP (<https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/1372.html>) 参照

#### 参考文献

- 相川延介,1995a,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その5」『観光みやげHOKKAIDO』（平成7年1.1）,12-3.
- ,1995b,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その6」『観光みやげHOKKAIDO』（平成7年11.1）,10-1.
- ,1997,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その7」『観光みやげHOKKAIDO』（平成9年11.10）,8-9.
- ,1998a,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その8」『観光みやげHOKKAIDO』（平成10年3.1）,14-5.
- ,1998b,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その9」『観光みやげHOKKAIDO』（平成10年5.1）,10-1.
- ,1999,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その10」『観光みやげHOKKAIDO』（平成11年3.1）,16-7.
- ,2002,「北海道観光土産品小史考（改訂） 民工芸品編 木彫熊その11」『観光みやげHOKKAIDO』（平成14年1.1）,14-5.
- ,2003,「北海道のみやげ品と意匠審議会の変遷」『DESIGNPROTECT』60（16-4）,43-5.
- 旭川龍谷高等学校郷土部,1990,『上川アイヌの研究、伝承者と生徒たちとの交流記録』福岡イト子.
- 荒井和子,1993,『焦らず挫けず迷わずに——エポカシ エカッチの苦難の青春』北海道新聞社.

- ,2013,『私の心の師 先生はアイヌでしょ』北海道出版企画センター.
- 福岡イト子・本間愛之編,2008a,『上川アイヌの研究Ⅰ』旭川龍谷高等学校郷土部.
- ,2008b,『上川アイヌの研究Ⅱ』旭川龍谷高等学校郷土部.
- 五十嵐広三,1970,『市民運動の証言——ドキュメント旭川』鶴書房.
- ,1978,『掘る・耕す・創る——北海道にひらく自治の実践と論理』鶴書房.
- 原田一典,1994,「明治前期の上川郡アイヌ」旭川市史編集会議編『新旭川市史 第一巻・通史一』,735-77.
- ,2002,「生活資料供給の担い手たち」旭川市史編集会議編『新旭川市史 第二巻・通史二』,577-94.
- 北海道教育委員会,1993,『北海道の諸職——諸職関係民俗文化財調査報告書』.
- ,2011,『平成22年度アイヌ民俗文化財調査事業 アイヌ民俗技術調査3〈詳細調査〉』.
- 石島忍,1981,『旭川の木彫り熊の話し』北海道木彫工芸協会.
- イヨマンテ実行委員会監修,1985,『イヨマンテ——上川地方の熊送りの記録』小学館.
- 海保嶺夫,1985,『蝦夷地の交易』『目の眼』104,25-9.
- 金倉義慧,2006,『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文研.
- 河野本道選,1981,『アイヌ史資料集 第2巻法規・教育編』北海道出版企画センター.
- 川上哲,2012,「木彫り職人と流通システム」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民族研究センター,99-107.
- 川上哲・伊井温彦・前正七生,2005,『北海道の木工芸の起源と現状と未来——木彫り熊のルーツを追って』『木彫り熊』研究会.
- 木村光夫,1999,『旭川木材産業工芸発達史』旭川家具工業協同組合.
- 小坂洋右,1994,『アイヌを生きる文化を継ぐ——母キナフチと娘京子の物語』大村書店.
- 越田清和,2012,「アイヌモシリの軍事化——旭川における陸軍基地の創設をめぐって」越田清和編『アイヌモシリと平和——〈北海道〉を平和学する』法律文化社,27-52.
- 松井恒幸,1983,『遺稿から 旭川とアイヌ文化』旭明社印刷所.
- 松田光春,2013,『近文先住民族保護概況』松田光春.
- 三好文夫,1969,「濁り水よ去れ——杉村キナラブック抄」旭川叢書編集委員会編『キナラブック・ユカラ集』,287-344.
- 門別薰,1995,「『アイヌ新法』異議を唱える——門別薰さん」飯部紀昭『アイヌ群像——民族の誇りに生きる』御茶ノ水書房,42-51.
- 村上久吉,1959,「生業と民芸」旭川市史編集委員会編『旭川市史 第1巻』,270-84.
- 西谷内博美,2018,『白老における「アイヌ民族」の変容——イオマンテにみる神官機能の系譜』東信堂.
- 大塚和義,1982,「アイヌの木彫り熊」『月刊みんぱく』55,15-7.
- ,1996,「アイヌにおける観光の役割——同化政策と観光政策の相克」石森秀三編『観光の20世紀』教文堂,101-22.
- ,2003,「アイヌ工芸,その歴史的道程」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『アイヌからのメッセージ——ものづくりと心』,128-35.
- 佐々木史郎・古原敏弘・小谷凱宣編,2008,『北海道内の主要アイヌ資料の再検討』人間文化研究機構国立民族博物館.
- 斎藤玲子,1994,「北方民族文化研究における観光人類学的視点(1)——江戸~大正期におけるアイヌの場合」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3,139-60.
- ,2007a,「木彫り熊と土産」『北方林業』59(12),15-8.
- ,2007b,「アイヌ工芸の過去と現在」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『アイヌからのメッセージ2007——現在から未来へ』,90-5.
- ,2012,「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民族研究センター,45-60.
- ,2018,「木彫り熊とみやげ」手塚薰・出利葉浩司編『アイヌ文化と森——人々と森の関わり』学術出版会風土デザイン研究所,74-84.

- 社団法人北海道ウタリ協会,1981,『先駆者の集い』27.  
\_\_\_\_\_1984,『先駆者の集い』35.  
\_\_\_\_\_1988,『先駆者の集い』46.
- 杉村京子,1995,「織りの伝承者——杉村京子さん」飯部紀昭『アイヌ群像——民族の誇りに生きる』御茶の水書房,32-41.
- 杉村京子・大塚一美,2012,「半生を語る 近文メノコ物語」田村善次郎・宮本千晴『あるくみるきく双書 宮本常一とあるいは昭和の日本18北海道2』,111-69.
- 杉村満エカシ追悼誌発行委員会編,2002,『ペニウンクル杉村満エカシ追悼集』マルヨシ印刷株式会社.
- 鷹栖村役場,1914,『鷹栖村史』
- 谷本晃久,2006,「近文アイヌと『旧土人保護地』移転問題」旭川市史編集会議編『新旭川市史 第三巻・通史三』,705-866.  
———,2009,「近文アイヌの『給与地付与』要求と『処分法』の制定」旭川市史編集会議編『新旭川市史 第四巻・通史四』,539-677.
- 竹ヶ原幸朗,2010,「『解平社』の創立と近文アイヌ給与予定地問題」竹ヶ原幸朗『近代北海道史をとらえなおす——教育史・アイヌ史からの視座』社会評論社,270-313.
- 上山浩次郎,2018a,「アイヌ文化の実践と内容」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民——札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして』(先住民族の社会学 第2巻)東信堂,114-32.  
———,2018b,「帯広市におけるアイヌ文化」小内透編著『帯広市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学アイヌ・先住民族研究センター,73-91.
- 吉田友吉,1989,『嵐山年表稿』小谷印刷.

(上山浩次郎)